

## ① 人穴富士講遺跡

人穴について、まず語られるのが、16世紀後半～17世紀前半、富士山体や人穴をはじめとする富士山周辺の風穴や湧水地などで修行したといわれる長谷川角行の伝説である。角行は、後に「富士講」と呼ばれる富士信仰の基礎をつくったとされる。角行の法脈は弟子たちに代々受け継がれたが、第五世からは二系統に分かれ、とりわけ第六世にあたる村上光清（むらかみこうせい：村上派）と食行身禄（じきぎょうみろく：身禄派）が後の「富士講」発展に大きく寄与したとされる。とくに食行身禄は、吉田口登山道七合五勺の烏帽子岩で入定を遂げたことにより、江戸の民衆の心をつかんだ。これが富士講隆盛のきっかけとなり、18世紀中頃にはそれが爆発的な広がりを見せるようになった。

こうした歴史をもつ、富士講の開祖長谷川角行は、溶岩洞穴「人穴」に籠もって四寸角の角材の上に爪先立つ修行を千日間行い、「仙元大日神」の教えを受けたと伝承されている。また、その後も各地で修行した角行は、1646（正保3）年に人穴の地で106歳で亡くなったといわれている。

溶岩洞穴としての人穴は、くの字型に曲がった構造で、入口から30mほどの位置に直径約5mの溶岩柱があり、最奥部までの全長は約80mで、人が立って歩行できる部分が約70mほどであるが、現在、安全性が確保できないことを理由に入洞は禁止されている。洞穴内には、祠と碑塔3基、石仏4基が建立されている。

## ② 御法家赤池家

かつて、人穴には光休寺（こうきゅうじ）があったといわれている。光休寺が具体的にどのようなものだったかは不詳だが、修行中の行者の世話をする場所だったとされ、御法家赤池家が光休寺に当たるとも考えられている。また、溶岩洞窟「人穴」の上に「大日堂」の建物があったと考えられているが、廃仏毀釈により廃されたという。御法家赤池家は、溶岩洞窟「人穴」と光休寺大日堂を含む人穴全体の管理を行っていた。人穴には、修行者の他にも多数の参詣者が訪れたため、赤池家は、修行者の世話や参詣者の案内・宿泊の世話、御札・御朱印の授与等を行っていた。また、現在も人穴周辺に多数残されている碑塔の設置場所を世話したり、造立の請負を行ったりしていた。1942（年昭和17）年、陸軍少年戦車兵学校の演習地として人穴地区が強制移転の対象となると、赤池家も人穴の地から北山へ移転した。現在、跡地には富士講碑2基がわずかに残されている。

## ③ 昔話：おおまっさあとこまっさあ

昔、人穴村に又次郎と又三郎という兄弟が住んでいた。兄の又次郎は小柄な男で、弟の又三郎は大柄な男だった。人穴には上井出との境を流れる境沢と少し北側の栗ノ木沢という2本の沢があり、二本の沢は、普段はほとんど水がなく、富士山に雨が降ると大水が流れ、橋がなかった昔はここを通る人は大変な思いをしていた。

兄弟は、富士山に雨が降ると兄の又次郎が境沢、弟の又三郎が栗ノ木沢で、通行人の沢渡を助けていたが、ある大雨の時に、いつもの様に沢に行ったが、雨が境沢に集中して大洪水になった。弟の又三郎は兄の手助けのために境沢に来たが、兄の姿が見えなくなる。又三郎は兄が川に流されてしまったと思い、荒れ狂う流れの中に入り、必死に兄を探した。しかし、又三郎も濁流に呑み込まれてしまった。

それを知った、人穴村の人々は二人の死を悲しみ栗ノ木沢の傍らに石塚を作り供養した。それ以来、境沢を小柄な兄又三郎にちなみ、こまっさあ（小又沢）、栗ノ木沢を大柄な弟又三郎にちなみ、おおまっさあ（大又沢）と呼ぶようになったということである。

## ④ 駒立の丘

上井出の北側に広がる間遠ヶ原に駒立の丘といわれる小高いところがあり、富士の巻狩りのおりに源頼朝が武将の狩の様子を見た所だといわれている。広い朝霧高原を見渡すには、駒立の丘は少し低すぎるので、間遠ヶ原一帯を見渡せるもう少し小高い丘であったのではないかとされている。

## ⑤ 的橋

この辺りには、的山や的石といった巻狩りを連想させる地名が残されている。

## ⑥ 富士講の碑（人穴富士講遺跡碑塔群No.249）

富士講の人々の巡礼の道筋は今でははっきりわからないが、ここに碑塔があることにより、現在の県道沿いを通っていたことが考えられる。正面の左側には、富士講の講印（講のマーク）と講が組まれた土地（両国）と、

先達（せんだつ、一般の人が富士山に信仰登山する際に指導し、導いてくれる人）の名前が刻まれている。中央は「志ら糸の瀧（しらいとのたき）」と書かれている。右側には1901（明治34）年6月、東京両国の木具師、後藤市五郎と刻まれている。

## ⑦ 北山用水埋樋

富士宮市内には、上野地域の大堰用水、沼久保・安居山地域の安沼用水、市街地を潤す渋沢用水、そして北山・山宮・外神などを灌漑している北山用水などの大規模な用水路がある。富士宮市はこれらの用水路の開発によって発展してきた。北山用水は、1582（天正10）年に徳川家康が北山本門寺の願いにより、代官井出志摩守正次に開発させたと伝えられている。この由来から、北山用水は本門寺用水とも呼ばれている。用水路には、富士山の沢に木製の箱樋を掛けて通水したり（掛樋）、木製の箱樋を地中に埋めて通水したりする（埋樋）などの工夫が見られ、当時の土木技術が優れていた事がわかる。

## ⑧ 芝山浅間神社

人穴にはかつて仏教施設「大日堂」があったとされるが、明治政府による神仏分離令により、大日堂は廃され、人穴浅間神社が置かれた。上井出に少年戦車兵学校が開校したのに伴い人穴地区の山野が演習地となり、地区の人々が芝山地区に移転した際に浅間神社も移転した。

## ⑨ 邯鄲沢（かんだんざわ）埋樋改修記念碑

邯鄲沢は、1862（文久2）年に埋樋が造られ、1908（明治41）年に改修された。その記念碑が埋樋の上に建てられている。

## ⑩ 上井出天満宮

天神山の麓にある天満宮には、富士山を模して造られた日本一高い土俵（比高3.776m）があり、秋祭りには子供たちの奉納相撲が行われる。

## ⑪ 富士講の碑（人穴富士講遺跡碑塔群No.252）

1902（明治35）年に建立された碑塔で、正面には東京の富士講、山吉講の講印（講のシンボルマーク）が彫られている。また、白糸乃瀧の文字も見られる。右側には、「宮内省消防組頭 神田錦町 石川三之助」と刻まれている。富士講は関東方面の講が多く、富士山への登山ルートは山梨の富士吉田から登山し、その後、人穴や白糸を訪れた人々が多いが、明治22年に東海道線が開通しているため、こちらを利用して白糸ノ滝を訪れた人々の道標であったと考えられる。

## ⑫ 工藤祐経の墓

富士の巻狩りおり、この付近に曾我兄弟の敵である工藤祐経の陣所が置かれ、討ち入った兄弟によって祐経が討たれたといわれている。

## ⑬ 曾我の隠れ岩

曾我兄弟がこの岩陰に身をひそめ討ち入りの相談をしたといわれている。

## ⑭ 富士講の碑（人穴富士講遺跡碑塔群No.250）

大正3年に建てられた碑塔。正面に講印と登仙元大神と書かれている。仙元大神とは浅間大神のことで、富士講の開祖角行は、この浅間を「仙元」と表している。

## ⑮ 食行身禄（じきぎょうみろく）の碑

富士講の開祖長谷川角行の教えは、二世、三世と受け継がれた。第六世にあたる食行身禄は、江戸中期、日常の道徳や実践を説き、貧しい民衆に希望を与えた。その後、弟子たちはその教えのもと、富士講という講を組み、富士山に信仰登山を行い、開祖の角行縁の地を巡礼しました。白糸ノ滝もその巡礼地のひとつで、この碑は身禄を慕う富士講の人びとにより建てられた。

## ⑯ お鬢水

源頼朝が富士の巻狩りを行った際に、ここで鬢のほつれを直したと伝えられている。